1

ヨーロッパ大陸からつきだした〝長靴〟、イタリア。その北端、けわしいアルプス山脈によってスイスと国境をへだてられた山岳地帯に、岩肌にそびえるような修道院があった。

ぎざぎざの岩山に、高地特有の薄い植物相がへばりつき、山あいには数件の農家が点在しているだけだ。それより少し南に下れば、シーザーやアウグストゥスなどローマ皇帝に愛されて以来、避暑地の伝統をうたわれるコモなどの湖水地方があり、百キロ南には、ファッションの発信地として世界にしられた商業都市、ミラノがある。

が、修道院は、わずか百キロの距離で、それら華やかな街とは、まったく隔絶された、壮厳で静寂に満ちた世界を保っていた。

南アルプスの岩山にそびえるロンバルディア・ルネサンスの壮大な建築は、見る者を圧倒する迫力を備えている。さまざまな色大理石をはめこまれ、精巧な彫刻をほどこされた壁面が、透明で清冽な空気の中に異彩をはなっていた。

内部に一歩足を踏みいれれば、ゴシック様式に、その建築はかわり、フレスコ画を描かれた円天井のもと、百数十本という柱に支えられた迷路のような大回廊が走っている。しかも

その回廊の周囲にはいくつもの個室があり、石造りの部屋の中では、十五世紀から五百年間、まったくかわらずに戒律を守り続けてきた修道僧たちが暮らしているのだ。

これだけの大建築であるにもかかわらず、観光客はもちろん、ふもとの村人ですら、足を踏みいれることはない。

彼ら修道僧に課せられた戒律は厳しい。文字通り、晴耕雨読で、晴天の日は自らの糧を得るために畑をたがやし、雨の日は、膨大な宗教書、美術書、文学書などを学ぶことで暮らしている。

その生活は質素で、現代社会ではおよそ考えられないほど禁欲的である。

沈黙は美徳――広大な建造物の中は、祈りを捧げるときのほかは、ぴんとはりつめた静けさが支配している。

あらゆる意味で、そこは別世界である。

静かなノックの音が僧院に響き渡った。

「入りなさい」

イタリア語で応じたのは、質素な僧服を身にまとった、八十近い老人だった。この修道院の院長である。

木の扉を押して、院長の部屋に足を踏みいれたのは、長身の東洋人の若者だった。二十歳になるかならずか、という年頃である。

「修業僧トマスだね」
深い皺を顔に刻み髪もヒゲも真っ白に染まった老院長は、東洋人の若者に訊ねた。
若者は膝をつき、頭をたれて、その言葉を肯定する意を表した。
「言葉を口にしてよろしい」
院長はいった。
「ありがとうございます」
若者はうつむいたまま答えた。着ている僧衣は、院長のものよりさらに粗末で、ところどころ破れ目を自らの手で縫い合わせたあとがある。
「トマスよ、お前が修道院にきて、何年になる」
「六年。じき、七年になるかと思います」
「十三、のときだったな。お前が遠い、東洋の国からやってきたのは」
「はい、院長」
「山を降りるときがきたようだ」
若者は驚いたように、さっと顔をあげた、
毎日の厳しい修行生活で、陽にやけ、ひきしまった顔に、すんだ光の満ちた瞳がはまっている。そして、初めてその若者の顔をみたなら、誰もが驚かされるだろうことは、大きく、立派な、その耳だった。
整った顔立ちをこわしてしまうほど、大きいわけではない。しかしその耳たぶは厚く、人

相に詳しいものなら思わず唸り声をあげるほど豊かな福相を示していた。さらに、額の中央、眉間のやや上には、ぽつんと星のようなホクロがある。
さらに奇異なのは、その右耳の耳たぶの上に小さいとはいえない穴が開いていることだった。そこには、金色の輪がはまっている。それが生まれつきの穴なのか、ピアスをはめるために開けたものなのかは、わからない。
日本では古来、耳たぶに穴（凹みのことだが）のある人物は、蛇をおそれぬ勇気をもつという、いい習わしがある。この耳の凹みは、遺伝によってひきつがれる、外形上の特質である。
「さきほど、イギリスはロンドンの法律事務所から手紙が届けられた。お前はそれをもってロンドンにいかねばならない。そのあとのことは、ロンドンの弁護士が教えてくれるだろう」
若者は無言で床に目を落とした。横顔には悲しげな色があった。
「ずっとここで暮らしていけたらと思っておりました」
低い声で若者はいった。
院長は首をふった。
「そうはならぬことを、お前は、ここにくる前、知らされておったのだろう」
「はい」
「お前は今日より、修道僧トマスではない。ロンドンの弁護士からの手紙には、お前のため

のパスポートや航空券がそえられてあった」
若者は無言で頷(うなず)いた。
「何があったのかは、わかっているだろうね」
「はい、院長」
「では祈りなさい。遠い東洋の国で、神に召されたお方のために。私も祈ろう」
「ありがとうございます」
院長室に祈りの言葉が低く響いた。
祈りが終わった。顔をあげた若者の瞳は濡(ぬ)れていた。
「部屋に戻り、支度をするがいい。修道院をでたら、迎えの者が待っている。ふもとの村の農夫だ。その者がトラックでお前をミラノ行きのバスの乗り場まで連れていってくれるだろう。バスでミラノについたら、鉄道に乗りかえて、ローマに向かうがよい。ローマからロンドンへは、飛行機が予約してあるそうだ」
院長はいって、ロンドンから送られてきた封筒をさしだした。若者はそれをおしいただいて、再び頭をたれた。
「そうそう、トマスよ、服はあるかな」
院長室を退室しようとした若者に、院長はいった。
若者は困ったような表情を浮かべ、首をふった。
「いえこの修行服しか。ここに参ったときに着ていた服は、今はもう、とても……」

この続きは、書籍でお楽しみください。
◎注意
本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。
個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。